

定例研究会

今年度最初の定例研究会を開催いたします。
終了後は懇親会を予定しています。皆さま奮ってご出席ください。

日時：2017年11月18日（土）15：00

場所：青山学院大学青山キャンパス間島記念館

（正門から正面奥に見えるコリント様式の外観を持つ建物）

報告：村山晴穂（文京大学）

「19世紀の文学作品にみるピューリタニズムの精神的遺産」

司会：中島渉（明治大学）

コメント：佐野正子（東京女子大学）



<報告要旨>

キリスト教文学また英米文学におけるキリスト教倫理に流れるピューリタニズムの遺産は、現代に至るまで世界中の人道主義的な読者に読み継がれている。

特に19世紀の『アダム・ビード』（メソジストの女性伝道師達により、死刑囚が回心し、天国を待ち望んでいた実話の小説化）を始めとして、『ジャネットの悔悟』（浸透する「信仰による義」のメッセージと良心）、『ロモラ』（宗教改革の先駆者サボナローラの中に神の愛と大義を見る女性ロモラの愛他性への発露）、『ダニエル・デロンダ』（シオニズム運動に向かう愛他的なダニエルの理想主義的な生き方）等を描き出した女性作家ジョージ・エリオット、愛と赦しの物語を連ねるエリザベス・ギヤスケル、加えて、愛と回心と信仰の物語『ハイジ』を描き出し、ピューリタニズム的な生き方を示唆する、スイス改革派教会のヨハンナ・シュピーリ、これら19世紀の靈感を受けた作家たちは、19世紀フィラデルフィア（博愛と友愛）の教会を彷彿させる作品を提供している。

初代教会における「初めの愛」への回帰と、信仰による義に立ち返るリバイバル運動の再起が、「愛する者への改変と完全」の意識をへて、再臨の時の栄化へと備える愛他性の行き方に連なる過程の確認を各作品が描き出している傾向を論証していく。